

2021年2月11日大齋前主日

列王記上 19 章 9-18 節

ペトロの手紙二 1 章 16-19 節

マルコによる福音書 9 章 2-9 節

本日は大齋前主日です。今週の水曜日 2 月 14 日に大齋始日の礼拝があり、大齋節に入ります。本日は 2 月 11 日、日本聖公会組織成立記念日です。1887 年に大阪で日本聖公会第 1 総会が開かれたことから数えて 137 年目です。代祷の中で記念のお祈りをいたします。

さて、本日の聖書日課は、二種類がありますが、列王記上、ペトロの手紙二、マルコ福音書の組み合わせの方から学びます。ことにペトロの手紙二を中心に学びます。ペトロの手紙は、文章名に「ペトロの」とあり、本文も「イエス・キリストの僕であり使徒であるシメオン・ペトロから、私たちの神であり救い主であるイエス・キリストの義によって、私たちと同じ尊い信仰を受けた人たちへ」（2 ペトロ 1:1）と始まっています。しかし、著者は十二使徒のペトロではないと考えるのが一般的です。書かれたのは 1 世紀末から 2 世紀はじめと予想されますが、正確にはわかりません。その意味では、ペトロの歴史的証言としての価値は低いと言えます。しかし、1 世紀から 2 世紀の教会の歩みを知る意味では大切です。

この手紙のあて先は、ペトロの手紙一と同じと考えるならば、「ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散し、滞在している選ばれた人たち」（1 ペトロ 1:1）ですが、特定は困難であり、地中海世界の教会全体に向けられたと考えるしかありません。ただし、「それは、私たちの主イエス・キリストが私に示されたように、私がこの仮の宿を離れる時が間もなく訪れることを知っているからです」（2 ペトロ 1:14）と遺言を思わせる部分があり、手紙の著者と受け手とが特別な関係にあるようにも思えます。また本日の箇所、「イエスが父なる神から誉れと栄光を受けられたとき、厳かな栄光の中から、次のような声がかかりました。『これは私の愛する子、私の心に適う者。』（2 ペトロ 1:17）と、明らかに本日の福音書箇所のお話、「すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。『これは私の愛する子。これに聞け。』（マルコ 9:7）と関係していると思われる箇所もあります。ただし、「これは私の愛する子」の部分は、翻訳文では同じになってしまうのですが、原文ではどの福音書とも微妙に違います。それゆえ、すでに福音書自体のお話が広まっていたと考えるべきか、そのような声があったという話が広まっていたと考えるべきか、判断が難しいところでもあります。近現代聖書学以前ならば、ペトロさんがしっかりと覚えていなかったからでしょうで落ち着いたのかもしれない。

さて、本日の箇所は、『聖書』自体の小見出しでは「キリストの栄光、預言の言葉」とあります。まずその「栄光」についてですが、「栄光」は「主の来臨」について語る根拠となっています。「私たちは、私たちの主イエス・キリストの力と来臨をあなたがたに知らせるのに、巧みな作り話に従ったではありません。この私たちが、あの方の威光の目撃者だからです」（2 ペトロ 1:16）とある通り、主イエス・キリストの力に満ちた来臨（再び来ること）を、作り話では

なく、「威光」の目撃者として知らせたからです。作り話ではないとは、勝手な創作ではないという意味でもあります。それは伝える手段として、ギリシア・ローマ世界の神話的表現を用いなかったという意味です。目撃したイエス様の変貌をそのまま証言したのです。なぜ、それが「主の来臨」に結びつくのか、それはその声の内容に関わります。「これは私の愛する子、私の心に適う者」は、先にみた通り、福音書におけるイエス様の受洗時、山上の変貌時の言葉と共通する意味内容があります。そして、その言葉自体は、王として審判者としてのメシア的な意味を記していると思われる詩第2編から理解されるのです（「私は主の掟を語り告げよう。主は私に言われた。『あなたは私の子。私は今日、あなたを生んだ。』求めよ。私は国々をあなたの相続地とし、地の果てまで、あなたの土地としよう。」）（詩2：7-8）。つまり、目撃されたイエス様の厳かな威光、それが示すイエス様の栄光とは、審判者としての栄光が主なる神様から与えられたことを意味するということです。そして、それゆえに主なる神様が定める終わりの時に起こるイエス様の来臨とは、イエス様が完全な審判者・勝利者として来てくださることである。そのように手紙の著者は告げているのです。

次は「預言」についてですが、預言という言葉を通して、それまで述べてきた事柄が、『聖書（旧約）』の預言に基礎を持つということが語られます。預言とありますが、ここでは主に詩編（第2編）です。ただし、「こうして、私たちは、**預言の言葉をより確かなものとして持っています。夜が明け、明けの明星があなたがたの心の中に昇るときまで、暗いところに輝く灯として、この言葉を心に留めておきなさい。**」（2ペトロ1：19）とある通り、『聖書（旧約）』の言葉は、イエス・キリストの出来事を通じて、より確かなものになったのです。それ故、この預言の言葉は、心の中を照らす灯火、希望の光であると述べられています。過去の言葉ではなく、イエス様を通して、今と未来を照らす希望の言葉になったということです。ただし、最後に預言の言葉（『聖書』の言葉）は、自分勝手に解釈してはならないと警告しています（2ペトロ1：20-21）。預言は、聖霊により語られたのであり、聖霊により正しく解釈されなくてはならないからです。

この手紙が書かれた時の状況は正確にはわかりません。ただし、主の来臨はいつか、救いの完成はいつか、教会の教えを信じていて大丈夫なのか、そのような問いと惑いの中が派生していたことは確かでしょう。この手紙が書かれて約二千年が経過した21世紀、わたしたちの状況の方が、科学、政治、経済、文化あらゆる面において、この手紙が書かれた時代よりも不安や惑いが多いかもしれません。この手紙の後半にある「**まず、次のことを知っておきなさい。終わりの日には、嘲る者たちが現れ、自分の欲望のままに振る舞い、嘲って、こう言います。『主が来られるという約束は、一体どうなったのか。先祖たちが眠りに就いてからこの方、天地創造の初めから何も変わらないではないか。』**」（2ペトロ3：3-4）という言葉は、現代の方が当てはまるのかもしれませんが。しかし、この箇所を含めて、『聖書』は主イエス・キリストの力ある来臨をしっかりと把握しなさいと告げています。その言葉自体が、人からではなく、主なる神様からの賜物として、光として伝えられているからです。その言葉を礼拝の中で聖霊を通して学び心に刻むこと、それは教会のみができることです。そして、教会のみが世界に伝えられることも、それもそこから生まれるのです。わたしたちもその教会の一つとして、歩み続けたいと思います。